

## 博士論文審査結果の要旨

### 博士論文審査委員会

主 査	藤澤 彰	審査委員	伊藤 洋子
審査委員	蟹澤 宏剛	審査委員	清水 郁郎
審査委員	角倉 英明		

氏 名	奥崎 智道
論文題目	佐渡島（新潟県佐渡市）における社寺建築専門の工匠とその変容について
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>日本建築の近代化は、欧米の建築学を学んだ建築家のもとで進められたが、一方で、近代化を可能にしたのは時代の変化に対応しながら活動を続けた江戸時代以来の技術を継承する工匠たちであった。近代化の過程の研究は、建築家の中央における活動が中心であり、実際に造営に携わった工匠の活動、あるいは地方の状況は看過されてきた。</p> <p>本研究は江戸後期から明治、大正、昭和にかけて、佐渡島（新潟県佐渡市）で社寺建築を専門とする工匠が、どのように明治維新の変革期を乗り越え、江戸期から培われてきた建築の構造技術、意匠、生産形式を継承し、あるいは、変質させてきたかを考察したもので、日本建築の地方における近代化を工匠の立場から論じたものである。</p> <p>本論文は序章と結章をふくめ6章から構成されている。序章では研究の視点と目的、佐渡島の社寺建築の現状を述べている。第1章では近世佐渡における工匠と社寺建築の特色を概観し、慶長期にあらたに來島した大工集団と中世以前から続く大工集団が存在していたことを明らかにした。第2章と第3章では江戸後期から活躍し、明治・大正・昭和にいたる、佐渡を代表する大工家であった明石庄右衛門家と間島壱三屋家の活動と建築遺構を詳細に論じている。第4章では明石、間島、両家のうちで昭和まで大工家として存続した間島家に着目し、その要因を3代目間島壱太郎（1878～1954）の活動にもとめ考察している。すなわち3代目間島壱太郎は、その頃佐渡において、官国幣社に準じる立場にあった真野宮御造営（祭神は順徳天皇）に棟梁として参画し、内務省神社局に関わることで、新規の得意場と新たな技量と意匠を獲得して、昭和30年頃まで活躍したことを明らかにした。結章では設定した研究の目的に対し、第1章から第4章までに得た成果をまとめ論文を総括し、明治維新前後の変革期に佐渡の社寺建築がどのように変容し、工匠がどのように活動し対応したのかを明らかにした。</p> <p>以上の内容は日本建築学会の査読付審査論文として、5編の論文に発表している（5編のうち3編は筆頭著者としての発表）。</p> <p>最終審査は2014年1月28日、14:00から16:00に5人の審査委員の参加を得て305教室で行った。約1時間の発表後、約30分の質疑応答を公開で行い、その後、審査委員のみで審査を行った。発表内容にそって、発表の分かりやすさ、広範な調査、史料・文献の博搜、問題設定と結論の妥当性、成果の論文発表状況、予備審査以降の修正項目などを確認し、評価シートにそって評価点を算出した。その後、無記名投票を行い、全員一致で最終審査合格と判断した。</p>	

## 論 文 要 旨

2014 年 1 月 9 日

※報告番号	甲 第 152 号	氏 名	奥崎 智道
主論文題名 佐渡島(新潟県佐渡市)における社寺建築専門の工匠とその変容について			
<p>日本建築の近代化においては、建築家を主流に、近代日本における主要都市と一部の地方で積極的に西洋化が進められ、それと同時に、建築家たちによって江戸時代以前の建築に対する関心や伝統意識の形成などが、西洋建築への従属的な理解の中で培われていった。そして、和風建築と称される建築が建てられていき、その中で内務省神社局・神祇院によって神社建築が創建・造営されていった。一方で、近代化の過程を可能にしたのは、時代の変化に対応しながら活動を続けた江戸時代以来の木造技術を継承する工匠たちであった。</p> <p>ところが、和風建築における伝統は、工匠たちが自律的に表現したものではなく、建築家たち独自の認識によるものであり、内務省神社局・神祇院によって創建・造営された神社建築においては、全国的に見た代表的かつ歴史的な神社建築を対象に伝統の解釈がなされた。一方、地方においては、工匠を主体とした従来の生産活動も行われており、明治以降においても社寺建築の固有の形式、土着的・地域的な特色を有するものが造営されている。しかし、明治以降に造営された社寺建築については、積極的に評価されてきたとは言い難い。</p> <p>社寺建築における近世と近代の連続性は、地域に即した視点をもとに造営した工匠の活動を通して理解する必要がある。そこで、本論文では、江戸時代以来、独自に文化を形成してきた佐渡島(新潟県佐渡市)における、社寺建築および社寺建築専門の工匠に着目し、江戸から明治という変革の時代をむかえ、それらがどのように変容したのか明らかにした。</p> <p>本論文は、序章と結章を含めた 6 章により構成されており、研究の視点と目的、佐渡の社寺建築の現状、研究の構成については、序章においてまとめた。</p> <p>第 1 章は、地方における近世社寺建築と造営した工匠との相互関係を明らかにすることが目的であり、離島という環境にある佐渡島における社寺建築文化が辿った経緯を論じた。そして、佐渡が江戸時代における佐渡金山の繁栄や北前船の発達などにより、島外から影響を受けつつ独自に社寺建築文化を養ってきており、17 世紀前期に社寺建築の先進地域である畿内を中心とした西日本各地から工匠が来島し、以後、江戸時代を通して相川長坂町に居住する工匠を中心に展開したこと、一方で、南部の羽茂地域において在郷とされる工匠たちが活動し、高野姓と藤井姓の工匠が江戸時代を通して独自に活動を展開していたことを明らかにした。</p> <p>第 2 章は、明治以降、社寺建築の造営や修繕に関わった工匠の活動の実態を明らかにすることを目的としており、幕末以降、代々に近陽を襲名し、明治、大正、昭和初期にかけて社寺建築専門として活動した沢根籠町の明石庄右衛門家の活動と社寺建築について論じた。そして、明石家が、江戸時代以来の職能や技術・技能に依拠した活動を続けており、近世的で土着的・地域的な特色を備えた社寺建築を造営していたが、昭和初期には、3 代目近陽(明治 33・1900 年-平成 3・1991 年)が彫刻師へと転業したことを明らかにした。</p>			

## 論 文 要 旨

2014年1月9日

※ 報告番号	甲 第 152 号	氏 名	奥崎 智道
<p>第3章は、第2章と同じ目的であり、幕末以降、代々に杵太郎を襲名し、明治、大正、昭和中期にかけて社寺建築専業として活動した沢根五十里の間島杵三屋家の活動について論じた。そして、間島家が、江戸時代以来の職能や技術・技能を維持するように活動を続けており、大正以降における3代目間島杵太郎(明治11・1878年-昭和29・1954年)の活動において躍進が見られ、真野宮御造営(真野新町 大正9・1920年7月上棟)をはじめ内務省神社局・神祇院が関係する神社造営事業に関わる活動を展開していたことを明らかにした。</p> <p>第4章は、一地方で行われた内務省神社局が関係する神社造営事業の実態とそれに伴う社寺建築の造形・意匠の変質、社寺建築専業の工匠の変容について明らかにすることが目的であり、内務省神社局技手による設計のもと、3代目間島杵太郎が棟梁につき、大正6年から9年にかけて行われた真野宮御造営について論じた。そして、3代目間島杵太郎が、御造営を通して内務省神社局・神祇院が関係する神社造営事業に対応できる技量を培っており、江戸時代以来の社寺建築の造形・意匠を継承する一方で、御造営を通して新たな造形・意匠を習得し、さらには神社本殿建築の作風が変化したことを明らかにした。</p> <p>結章では、序章において設定した目的に対し、第2章から第4章までに得た成果をそれぞれまとめ、補足的な指摘を加えながら本論文の全体を総括した。そして、江戸時代から明治という変革の時代をむかえ、社寺建築がどのように変容したのか、社寺建築専業の工匠がどのように活動を持続し、変容したのか考察した。</p>			